

Mountain Bike Feelds

マウンテンバイク・フィールドについて

近年のマウンテンバイクはアウトドアブームに乗り、順調に人口を増やしてきておりマウンテンバイクを使用したイベントも年間300を越えて行われるようになってきました。しかし、いまだマウンテンバイクに開放されているエリア、コースは非常に少なくマウンテンバイクファンにとっては走る場所を探すことが急務となっております。また、熟練のマウンテンバイカー達はハイキング道や林道を組み合わせてツアーに出かけているようですが一般やこれから楽しもうとする人達には辛いと言わざるを得ないでしょう。

特に週末圏、休暇圏のリゾートにおいてはスポーツアイテムのひとつとしてマウンテンバイクを使用することはごく自然になってきています。(欧米ではポピュラーなアイテムになってきているのはウイッスラー等の例でご承知の通りです)しかしながら簡単にコースを開放すれば良いわけでもなく当然ながら施設やソフトウェアの充実も欠かせません。イベントとして競技大会等の企画もするのであれば、なおさらそれらの必要性は高まってきます。

1. マウンテンバイクとは

(1) マウンテンバイクの成り立ち

マウンテンバイクはアメリカ西海岸より誕生し広まった自転車ですが、文字通り山の中に持ち込んで走り回る為のものです。当初は下りだけを考慮し、登る際には自動車で移動するといった、リパックと呼ばれるダウンヒルレースが流行し、ツーリングも普及しましたが、協会ができてレースが開催されるようになり、さまざまな種目が生まれました。長距離をマラソンの様に競争するクロスカントリー、スキーの滑降競技同様のダウンヒル、障害物を越えていくトライアルが代表的な種目です。

アメリカを中心に動きだしたマウンテンバイクは自転車界の新勢力として、その後世界に広まり、ツール・ド・フランスで名高い自転車王国のフランスやイタリアでも普及し、1990年にはUCI(国際自転車競技連合)による第1回世界選手権大会(USA、コロラド)、1996年にはオリンピックの正式種目として採用されました。

日本でも日本マウンテンバイク協会が1987年に設立され、全日本選手権を開催、世界選手権にも代表派遣を行い、折からのアウトドアブームもあり、さらに、今までの自転車には無かった、強靱でありながら軽く、機動性と実用性、ファッション性も見事に統合されている点で注目を集め、ヒット商品として拡販、定着されております。(1996年よりトップアスリートは(財)日本自転車競技連盟登録へ移行)

さて、そのような発展を見せたマウンテンバイクの魅力とはいったい何だったのでしょうか。マウンテンバイクの魅力をあげてみましょう。

マウンテンバイクの魅力

マウンテンバイク(自転車)によって **自分の力で** 動かす楽しさ。

他の乗り物と違って非常に **リアルな操縦感** (すぐれたスポーツカーに通ずるもの)

他の自転車には無い、 **すぐれた操縦性** の許容範囲

自然の中での **爽快感**

個人の技量にあわせた **エクササイズ** が可能

体感スピードは早いですが、実際のスピードは時速30km程度であるため **比較的安全** である。

マシンからウェアまでの機能的でありながら高い **ファッション性**

(2)マウンテンバイクの楽しみ方

どうしても競技がイメージとして先行してしまうが、基本はツーリングである。目標を決めてそれを目指したり、もしくは目標のないものでかまわない(日本では目標がないと行動に移れない場合が多いが)。目標は山頂や展望台、温泉、滝、名所旧跡、もしくは道の行き止まりであったりする。

アメリカの本格的な競技においても50才位の選手がプロと共にスタートして行ったりするが、かたや、3時間程度でゴールするプロ、5時間位をかけて途中、昼休みを取りながらゴールする選手もいて、まさしく楽しんでいるといった感がある。もちろん表彰も終了した状態でゴールなので記録にも載らないし役員も片づけに入っている。記録が問題ではないのだ。

ある時にはライディングが目的ではなく、バードウォッチングや、フライフィッシングの為の移動手段となる。また、マウンテンバイクを組み合わせたオリエンテーリングやこれに似通ったピンゴツーリング等も企画実施されており、まさしく自然と遊ぶ際の道具のひとつとして位置付けられます。

(3)マウンテンバイク・フィールドの展望(ニーズ)

さて、ざっと国内の販売台数は1997年までで600万台を越えておりますが、そのような状況の中で、常に日本の代表的な進み方である、ハード先行のパターンは変わっておりません。日本マウンテンバイク協会でもソフトの普及ということで競技大会のみならず、各種スクール、指導者育成に力をそそいでいる状況です。

本来マウンテンバイクの場合には、気軽に入っていく林道や小道を散策したり、もしくはお弁当持参でのハイキング型が主流ではありますが、初心者の方にいきなりおすすめできるような場所も限られています。他のスポーツではスキー等が好例であり、スキー場という比較的安全で、しかも各種施設が整っている場所であれば快適にスポーツを楽しめるという図式です。

マウンテンバイクのニーズの状況

現状	都市化、情報化	自然とのふれあいの欠落
対応	全身運動、有酸素運動	自然回帰 自然の中のライディング
施設	拠点としての人たまり	MTBコース 緑のオープンスペース

特にこのプロジェクトに対して取り組み易さを考慮するとスキー場がまず考えられます。マウンテンバイクの活動時期はオールシーズンとも言えますが、やはり雪のなかではちょっと...。ということで春、夏、秋と限定しても、どちらにせよスキーのオフシーズンとなり遊休のスキー場は格好のマウンテンバイクフィールドに成り得る可能性を秘めています。また、ヨーロッパではスキーのナショナルチームが夏場のマウンテンバイクによるトレーニングを採用、冬の世界選手権、ワールドカップは勿論の事、夏のマウンテンバイク世界選手権にも参加してくるという勢いです。有名な所ではカナダのウイッスラーやアメリカマンモス等すでにご承知の通りです。各施設もすでに整っているスキー場はマウンテンバイクに一番近い場所ではないでしょうか。

では、スキー場以外の場所ではどうなのか。勿論、元々自然相手のスポーツですから、あらゆる状況に対応できるのも魅力です。適当な起伏があり景観や雰囲気も重要な要素です。たとえば、牧場のような場所や、森林公園風のもの、オートキャンプ場の外郭コース等、さまざまなものが考えられますが、問題はどの様なターゲットに対してのアプローチなのかが、その設定コースとあいまって条件を満たす事が出来るかです。それには、ターゲットの明確化と施設の考え方を決定すべきです。

(4)マウンテンバイク・フィールドの機能

フィールドの機能もその使われ方によって異なる。おおまかに分けても、都市圏日帰り型、週末に1～3泊位する都市圏週末型と、比較的長期にわたるリゾート休日型と3通り考えられるが、それぞれについて快適性、利便性、自然性、カジュアル性といった項目ごとに考察すると、

* 都市圏日帰り型

交通アクセスが優れていて気軽に利用できる事がポイント。完全な自然環境ではなくとも、雰囲気があり、自然未経験者でも安心してプレイ出来るように、各施設の充実も必要。特にファミリーでの利用が多いと思われる、本格的なコースやトラック建設よりも技術的な練習ができる遊び場を中心にすべきである。

* 都市圏週末型

都市圏といえども1～3泊程度の宿泊が可能、また宿泊をすべき場所(すばらしいロケーションである)である事が条件である。まわりの名所、旧跡等を配布するマップに書き込んで周遊させるのも良い。

* 地方リゾート型

連泊が可能で、マウンテンバイク以外の施設も豊富に必要である。但し他のスポーツ施設と比べてもアドバンテージがあるうえ、全体の効果を高める結果となります。

* 他のスポーツとの比較

対 テニス

コートが多く必要で1コートあたり数名しか利用できない。コートの維持管理も必要。マウンテンバイクはフィールドが広い分収容人員は有利。基本的にコースの維持管理は必要ではあるが生活範囲であろう。

対 乗馬

非常にある意味では似ている部分がある。しかしながら乗馬へのきっかけ作りには、かなりのプラン、仕込が必要である。マウンテンバイクはその点気軽である。

対 スキー

これもよく似ているものだが基本的にシーズンが異なるので競合ではなく共存できるものである。同じようなレイアウトや、その他、施設も使用することが容易である。但し、マウンテンバイク導入は初期から行うのがレイアウトの点でも有利であることは言うまでもない。

対 スイミング

マウンテンバイクに適切な場所にプールを建設するのは、すこぶる贅沢な試みだがマウンテンバイク(に)かぎらず、スポーツのリラクゼーションには最適である)にも有効であるのであった方が喜ばれる。

2. マウンテンバイクフィールド・コンセプト

(1)自然との関わり。

基本的にマウンテンバイクによるスポーツ活動は自然相手ではあるが自然に対して脅威を与えるようなものではない。(勿論、むやみに山の道なき部分に分け行ったりすれば別であるが、ほとんどの場合、徒勞に終わってしまうし、目的もない)通常、既存の林道やハイキング道(USAではファイヤーロードと呼ばれる山火事防止道が多くある)を使用したツーリングが基本である。コース設定も自然をいかに活かせるか、さまざまな規制に対して十分クリアできるかがポイントとなる。その為には十分な現地調査と現地所轄省庁との打ち合わせを行う必要があります。

(2)コースの設定に関して。

個人のレベルに応じたコース設定が必要です。具体的には

小学生～中学生程度 初～中級程度	ショートトラックのBMXコースや類似したもの、ライディング・スクールの基礎編や基本テクニックの習熟に
中学生～成年 初～中級程度	アウトドアツーリングが楽しめるコース、できれば途中に各ポイントを設定し、それが名所、旧跡であったり展望ポイント、水のみ場といった設定が良い。競技コースと重なっていたりしてもかまわない。また、エリアを周辺に広めて舗装路も含めたサイクリングコースの設定も良い。
競技レベル 中～上級	国際自転車競技連合規則にあわせたものが好ましい。これにより公認コースという名称を使うことも可能性がでてくることと、公認大会誘致に不可欠である。上記のツーリングコースと重なっていても良い。またコース途中にはいくつかのエスケープルートがあったほうが良い。できればコースもそのたびに設定変更が出来るようなサブルートを設定しておくとおもしろい。

各年齢による設定

年齢	～12才	13～25才	25～35才	35～才
コース	易しい	難しい	少し難しい	易しい
距離	短い	長い	少し長い	短い
起伏	少し	多く	多く	少し
時間	休みながら	連続	連続	休みながら

実際には上中初の3コースを設定しそれを更に区分けして設定しても良いだろう。ただし飽きのこない設定にするのがこつとなる。

(3)施設

施設にはターミナル機能として、食事、休憩所、宿泊所、キャンプ場、ロッカー、シャワー、WC、救護室、レンタルショップ、等が求められる。ただしすでに営業しているスキーリゾートや観光地であればそろっているであろう。

コースには標識が必要になる。かなり広いエリアになることが多く、アクシデントに対しても有効である。競技規則にあるもの以外に距離や行き先が表示されているもの。アイコンで表示するのが良い。

(4) ヒューマンウエア。

人を引き込むにはエリアの開放だけでは多くは望めない。一部マニア相手の営業は簡単に思えるが全人口の10%にも満たないエリート競技者は逆に集まりにくく。

広く一般にも仕掛けとしてカルチャーライフ提案が必要ではないか。基本的なライディング・スクール、バードウォッチングや、草木の自然観察が代表ではあるが、エリアの安全使用に効果が高いのはライディング・スクールである。もともと自転車ということで安易に考えるむきもあるが、単純構造ゆえ、ライディングのミスもそのまま返ってくるだけに、ぜひとも受講させたい。その時に必要になるのがインストラクター、ガイド等のヒューマンウエアーとなる。日本マウンテンバイク協会での公認インストラクターや公認普及員もいるので協会に問い合わせてみるのがよいだろう。

3. ビジネス展開

ビジネス展開としてはどうか。コースだけで収益をあげることはスキーの例からもむずかしい。付帯施設での収益を考える必要がある。また、人集めには、ということで以上をまとめてキーワードをいくつかあげて参考に使いたい。

自然と利便性

自然の豊かさを使い易さ(交通も含む)

快適性の追求

自然と競合するが施設の整備

本格的なもの

本格的なものによる知的、心理的な満足

施設をあらわすネーミング

快適性や新しいイメージ

マップ、施設看板

グラフィックを多用したもの

イベントの誘致

イベントによる告知効果

APR,1992 作成

APR,1998 改訂

ここに掲載されている写真、記事の無断転載は固くお断りいたします。

Copyright © Japan Mountain Bike Association All Right Reserved.